

注目される植物

新池周辺の谷筋にはわが国でも屈指のキヨスミウツボ群落のほかに、次のような注目される植物がみられた。これは、深く刻まれた谷筋が変化に富んだ環境をつくりあげ、低温で湿潤な気象条件と相俟って、このような特徴的な植物を遺存させるレフュージア(逃げ場)の役割を果たしてきたためと考えられる。なお、新池周辺の植物目録は付表2に示している。

ヒナノボンボリ *Oxygyne hyodoi* Abe et

Akazawa (ヒナノシャクジョウ科)

1992年6月に新池近くの“太陽と緑の道”沿いの落ち葉の下から1個体だけがみつかった(図78, 小林・黒崎1993)。そこは両側が切り立った斜面で切通し状になった小さな枝谷にあるコナラやアラカシなどの二次林の林床である。神戸市が宮崎市長の時代につくった“太陽と緑の道”沿いに自生地があったことは、当時の“太陽と緑の道”が神戸市の『優れた自然』の真っ只中を通っていたことの証であり、非常に興味深い。当地は愛媛県西海町に次ぐ本種の国内2番目の産地であり、ヒナノボンボリ属としても、カメルーンの *Oxygyne triandra* と沖縄のホシザキシクジョウソウ *Oxygyne shinzatoi* に次ぐ世界で4番目の産地ということになる。環境庁自然保護局野生生物課(2000)では絶滅危惧植物IA類(CR)となっている。当地のものは西海町のヒナノボンボリとは、花期や花被・花柱の形状が異なっており、新しい分類群(新種)である可能性が考えられる。しかし1個体だけの標本であったため、解剖して詳しく調べることができなかった。さらに検討を加えるべく新たな個体を見つけようと、毎年6月になると自生地付近の落ち葉を1枚、1枚めくるようにして付近を探し続けたが、再発見することはできなかった。本種のようにまだよくわからない分類群が発見された谷筋は保全してほしいと神戸市に要望し続けてきたが、ヒナノボンボリの自生地は1999年に消失した。



図78 神戸産のヒナノボンボリ
(植物体の長さは1.5cmほどしかない)

ヤマホオズキ *Physalis chamaesarachoides* Makino (ナス科) (図79)

兵庫県内では数箇所の地点(当地のほか、大屋町、朝来町、上月町、新宮町、氷上町)で標本が採られているが、今でも生育地を確認できる場所は極めて少ない。当地では、新池の谷筋にあるモウソウチクが混じる暖帯二次林で1987年8月にみつかった(小林1989)。発見当初は10数個体の集団であったが、周辺の林の遷移が進み暗くなるにつれて個体数は減少した。ちなみに、プラント創刊号に載っている井波一雄氏のヤマホオズキの花の図(井波1988)は、著者の一人小林が当地で採って氏に送った材料をもとに描かれたものである(小林1989)。当時全国各地を歩き続けていた井波氏でも20年間もみることができなかったほど、本種の自生地は当時でも既に非常に少なくなっていたようである。ちなみに、本種は環境庁自然保護局野生生物課(2000)では、絶滅危惧IB類(EN)であり、今でも確認できるのは兵庫県を含めて、わずか10府県になっている。まさに日本列島から絶滅しかかっ